

式辞

梅の花は別名「春告草」(はるつげぐさ)とも言われます。今年は記録的な暖冬でしたが、今、見頃を迎え春の訪れを告げてくれています。

本日、ご来賓、保護者の皆様にご出席をいただき卒業証書授与式が挙行できますことを、厚くお礼申し上げます。

卒業生の皆さん卒業おめでとう。高校卒業は3年間という時間をかけて積み重ねたことの成果です。

また、これまでお子様方の成長を見守られてきたご家族の皆様には、この節目は感慨も一入(ひとしお)のことと思います。

心よりお祝い申し上げます。

卒業生の皆さんの節目に当たり、今年話したり書いたりしたことから、改めて伝えたい言葉を三つ贈ります。

一つ目は「生きている」ということです。

2学期終業式で五木寛之氏の「遊行の門」の一文を紹介しました。

アイオワ州立大学の実験で、一本のライムギが四カ月生きるために、地球の直径ほどの一万一千二百キロの根が鉢のなかに張りめぐらされたことが明らかになります。その細い根からもろもろの成分を吸いあげ、ライムギの命は支えられているのです。

五木氏は

「その麦に、実がたくさんついていないじゃないか、とか、形が貧弱じゃないか、とか、文句をつけることができるだろうか。

生きる、ということは、それほど大変なことなのだ。」
と言います。

さらに私たち人間は、太陽の光や空気、食物や水だけではなく、愛情や希望や理想といった様々な精神的なサポートをも必要とし、また、眠っている間も体全体が連動し必死で生きている、つまり、生きているということは、それだけで、じつに凄いことなのだ、という話でした。

五木氏の言葉

「いまを生き、なんとか明日も生きようとしている人間に、私は心の底から敬意を表したいと思うのだ。人は生きているだけで価値がある。そんな自分を尊敬し、大事にしなければ。」

を、是非心に留めておいてください。同時に、周囲の人を尊敬し、大事にしてください。

二つ目は、「協調すること」と「空気を読むこと」です。

皆さんは、体育祭、文化祭、部活動など学校生活の様々な場面でチームで取り組む経験をしました。そして、チームで取り組む機会はこれからも何度もあるでしょう。

人が集まれば、意見の違いがあることは当たり前です。気が合う、合わない、という理屈を超えた衝突もあります。

それを乗り越えて「協調」できたとき、1+1以上の力が発揮されます。素晴らしいことです。

しかし「協調」と「場の空気を読む」ことに汲々とするとは違います。何より「空気に流され」てしまっはいけないと思うのです。

山本七平(しちへい)氏という方が1977年に書かれた『『空気』の研究』という本があります。この本は、例えば、戦時中、客観的には無謀であった出撃について「その場の空気からそうせざるを得なかった」という発言などを例に、時に客観的データや論理的議論

より「空気」によって決まってしまうことがある危険性を論じています。

周囲の「空気を理解」し協調することの必要性と同時に、自分が正しいと思うことを失わず「空気に流されない」主体性を大切にしてください。

三つ目は、41年前高校卒業を迎えた当時の自分にかきたい言葉、「学生時代に世界を見よう」、です。

私はまだ一度も外国を訪れたことがないのですが、これは59歳の今の正直な思いです。ここ数年日本を訪れる留学生と接していてこの思いが膨らんできました。短い時間を一緒に過ごただけですが、留学生の旺盛な意欲から味覚の違いまで、新鮮な驚きが尽きませんでした。グローバル社会を生きる上で英語も大切ですが、まずは、異文化の中に身を置く体験こそが大切だと思うのです。若い皆さんならきっとたくさんの刺激を受け、その後の人生の大きな財産となるはずです。

「トム・ソーヤーの冒険」の作者、マーク・トウェインは1869年「The Innocents Abroad」というヨーロッパへの旅行記にこんな言葉も残しています。

「旅することで、先入観や偏見、視野の狭さ、といったものがなくなっていく。だから、私たちの多くは旅を必要としている。人や物事に対する広く、健全で、慈悲深い考え方は、地球の片隅でぼんやりと人生を暮らしているだけでは得ることができない。」

卒業生の皆さんが校訓「磨く・拓く・翔（はばた）く」のように、広い世界に「翔（はばた）く」ことを心よりお祈りして、式辞といたします。

令和二年二月二十八日

愛知県立松蔭高等学校長 戸 倉 隆